

意見交換会実施報告書

【1班】

【1次】

開催団体	川内ばれっと			参加人員	15人	
開催日時	令和7年11月12日（水） 13：30 ～ 15：00					
開催場所	国際交流センター(研修室B)					
出席議員 （担当）	議員名	出欠	担当	議員名	出欠	担当
	山中 真由美	○	開会挨拶・進行	坂口 正幸	○	記録報告書作成
	小林 健	○	閉会挨拶	屋久 弘文	○	勉強会調整
	下園 政喜	○		松野 信作	○	記録録音
	福田 俊一郎	○	記録写真	佐多 貴文	○	
	成川 幸太郎	○				
意見交換の内容（凡例 ◆団体の意見 ◇議員の意見）						
1 空き家の現状と対策について						
(1) テーマの趣旨						
これからますます増えていく空き家を他人事ではなく自分の問題として考え、どのように対応したらいいかなどについて意見交換したい。						
(2) 意見交換会の概要						
◆ 空き家を空き家バンクに登録したところ、不動産に現地を評価していただいた。しかし、その結果が「評価額0円」とされ、正直なところ、もう少し価値を付けていただけたと思っていたため驚いた。こちらとしては、もう少し価値が認められればと考えている。また、家の中には多くの荷物が残っており、その処分には100万円ほどの費用がかかると言われた。						
◇ 家を貸す場合は、価値を高めるためにハウスクリーニングを入れて、きれいに磨き上げておくことも大切である。						
◇ 空き家に残っている荷物については、業者に依頼すると費用がかさむため、自分でトラックを借りてクリーンセンターへ持ち込むという方法もある。						
◆ 今住んでいる家を空き家にしないための工夫やアイデアが、人が集まる場の中から生まれてくるようなになればよいと思う。						
◆ 住まいが将来的に空き家になる可能性があることは意識しているものの、手引きには「どのような利用が望ましいか家族で話し合えよう」と書かれており、どのような内容を話し合えばよいのかわからない。もし、講座などあれば市の空き家対策にもつながるのではないか。また、手立てはないのか。						
◇ パレットの方々が空き家問題に関心を持たれているのであれば、建築住宅課へ相談し、空き家対策に関する出前講座を実施していただくことを検討されてはいかがか。専門的な知識を学べる良い機会になると思う。						
◇ 現在、市では44の出前講座を行っている。ご意見のあった空き家対策・空き家バンク、木造住宅の耐震や改修に関する内容も出前講座の対象となっている。パレットの皆様で企画していただき、出前講座の申請をしていただければ、市から担当職員が伺う。なお、これらの講座の担当課は建築住宅課になるので、そのときに詳しいことを聞いていただければと思う。						
◆ 本市に住んでいない所有者の空き家に関しては、どのような対策が講じられているか。						
◇ 薩摩川内市内には、現在5,888戸が存在している。市では、空き家の状況に応じ						

てA～Dランクの評価を行っている。

- ・ Aランク：すぐにでも利活用できるもの
- ・ Bランク：軽微な修繕で利活用可能なもの
- ・ Cランク：大規模な修繕が必要なもの
- ・ Dランク：解体が必要なもの

土地については登記義務があり、所有者が確実に把握できる。しかし建物は、法律上登記義務がないため、未登録の建物が多く存在している。とはいえ、固定資産税は誰かが支払っているため、市としても一定の情報は把握している。

空き家の利活用や解体には課題がある。特に解体を行うと、建物に対する固定資産税の控除がなくなり、税負担が増えるという問題があるため、簡単には進められないケースも少なくない。

- ◆ 私たちが今住んでいる家も、数十年後には空き家になる可能性がある。マンションでは、毎月の管理費や修繕積立金を使って、将来の修繕やメンテナンスに備えている。一戸建てでも同じ考え方が必要ではないか。家を建てる時には、将来、住まなくなったり、解体が必要になったりした場合にかかる費用のことも考えておくことが大切である。火災保険のように、「将来自分が住まなくなったときにかかる費用」をカバーできる仕組みがあれば安心である。

つまり、家を建てる段階から将来を見据えて準備しておくことで、暮らしの安心につながるのではないか。

- ◇ 私も、家を建てる際には、自分で家を壊すときのことまで考えていなかった。現在、国の方では、ソーラーパネルの廃棄に備えた積立制度が始まっている。この話も国家事業になるとは思うが、実際に取り組んでみるのも面白い試みだと思う。

- ◇ 長期的なローンを利用し返済期間が長くなると、将来に向けて住宅の維持や修繕のためにどの程度積立てをしていけるかを見通すのが難しいと思う。

- ◆ 川内パレットでは、男女共同参画やジェンダー平等の視点からさまざまな課題を見ている。空き家問題も、単に家がどうこうという話ではなく、過去・現在・未来を通して捉える必要がある。

現在の70代・80代の方々は、男性が外で働き、女性は家庭を守るという役割分担が一般的であった。そのため、結婚して子どもが生まれると女性は家庭に入ることが期待されていた。

今、その世代が年金生活を送る中で、夫に先立たれた場合、一人暮らしの女性世帯が多くなっている。そして、固定資産税や空き家対策の負担は、年金生活者にとって非常に重いものである。

こうした背景を踏まえ、議員の皆さまには空き家問題や将来の政策立案の際に、ジェンダーの視点を取り入れていただきたいと思う。ジェンダー視点というと、女性の管理職増加や働き方改革などが思い浮かぶが、昭和時代の「女性は家庭を守るべき」という価値観が、現在の社会課題につながっていることも忘れてはならない。

これからの政策立案では、ジェンダー視点を取り入れ60代・70代の方々に専業主婦だった方々の現状や、空き家問題との関連も考慮していただきたいと思う。

- ◇ 人口減少が進む中で、空き家が増えること自体は止めようがない。一方で、若い世代は、新築志向が強く、住宅産業も新築供給を続けている。こうした状況では、どうしても空き家は生まれてしまう。

家電製品などは、今、リサイクル法の下で適正に処理・循環が行われている。同じ考え方でいけば、住宅についても「使用後の扱い」を制度として考え、空き家そのものをリサイクルの概念で捉える仕組みを、国として考えていただく必要があると思う。

- ◇ 紹介になるが、薩摩川内市では、ふるさと納税の返礼品として「空き家見守り点検サービス」を行っている。家を残して市外にお住まいの方に向けて、建築士が現地を訪問し、建物の状態を確認・点検した上で、写真付きで報告するサービスである。1万円のふるさと納税で利用でき、空や家について不安をお持ちの方がお近くにいらっしゃったら、ぜひサービスについてお声かけくださるようお願いする。

2 若い世代が住みたいと思う街づくりについて

(1) テーマの趣旨

高校までは本市で学んでいる若者が、他県で大学・専門学校などを卒業して本市に戻ることなく、他県の会社に就職してしまうことが多い現状から、なぜ若い世代は、本市に魅力を感じないのかなどについて、若い世代でない私たちが考える視点から意見交換をしたい。

(2) 意見交換会の概要

- ◆ 薩摩川内市は、DEI宣言を行い、「多様性を尊重し、誰もが力を発揮できるまち」を目指している。もし、この意識がない企業にも浸透しているのであれば、若者が地元の魅力を感じ、働きたいと思う理由になるはずである。議員の皆さんは、企業の皆さんと意見交換を行う中で、こうしたDEIの考え方や、多様性を尊重し働きやすい環境づくりへの意識の高まりを感じる場面があるか。

◇ 本市では、イクボス宣言や男女共同参画の推進に積極的に取り組んでいる企業を表彰するなど、鹿児島県でも、条例制定が比較的早く行われた自治体であり、先進市とまでは言わないが、企業の中には着実に取組を進めているところも多いと認識している。

- ◆ ジェンダー視点といったとき京セラでは、どのような感じか。

◇ 最近では、男女共同参画に会社全体で取り組んでおり、男性職員の育児休暇の取得率も高くなってきている。また、女性職員の責任職への起用も増えてきており、女性職員の環境も変わってきている。

◇ 昔と違い、国が法律や制度によってしっかりとした枠組みを示しており、その上で重要なのは、国が示した指針を企業がどのように受け止め、実際の行動につなげていくかという点である。企業が主体的に取組を進めることが大事な視点だと考える。

◇ 先ほど、イクボス宣言の話がでたが、今、本市が取り組んでいるものとして男女ともに仕事と生活の両立を実現する制度や、風土づくりに積極的に取り組む企業を認定する制度である。令和7年10月現在で28社認定されており、目標値として令和11年までに40社まで増やすことに取り組んでいる。

- ◆ 京セラのフレックスタイムの現状を教えてください。

◇ 京セラの場合は、「コアタイム」を設定した柔軟な働き方を導入している。決められた時間帯だけは会社にいるようにし、その前後については、早く来ても遅く来ても構わない。さらに1か月のトータルで一定の勤務時間を満たせばよいという仕組みになっており、従業員が自分の生活スタイルに合わせて働ける制度になっている。

- ◆ 議員の皆様にお聞きしたいが、どうして若者は残らないのか、また帰ってこないのか考えを聞かせていただきたい。

◇ 本人が決めることであり、他人がどうこう言えるものではない。どこに魅力を感じるかも人それぞれで、時には家庭の事情で地域を離れる方もいる。そのため、「若者が出ていく理由」を単純化して論じることは難しく、さまざまな観点から検証する必要があると考える。しかし、一方では、私は“出ていく人を止めること”よりも、“帰ってきたいと思う人をどう増やすか”を重視したほうがよいのではないかと、個人的には思っ

ている。

若い世代が外に出る理由には、夢があり、より広い世界を見てみたいという前向きな動機も多くあるのではないかな。

- ◇ 私の娘も大学進学で市外に出たが、卒業後は実家に戻ってきました。若い方々は、進学や就職を機に福岡や関東、関西へと進んでいくのが現状である。そして、地元へ戻るかどうかを考えるときには、自分がやりたい仕事があるのか、また自分の力を発揮できる職場が地元にあるのか、さらに給与面が同等かどうかなど、さまざまな視点から判断しているのだと思う。また保護者の皆さんも「一度は外に出て視野を広げてほしい」と勧められることがあるのではないかな。その上で、いずれ地元に戻ってきやすいように若者と地域のつながりを保ち続けることが大切だと感じている。家族はもちろん、地域の方々ともつながりを残し、いつでも地元で溶け込める環境を整え、若者が“帰りたい”と思えるようにできたらと考える。

- ◇ 私自身も、かつて川内に残るつもりはなかった。高校時代には「大学に進学して都市圏に出たい」という憧れがあった。今の子ども達が地元に残ってくれるかどうかを考えると、やはり最終的には、給与水準や労働条件、そして遊ぶ場所などの生活環境が整っている地域を選ぶのだと思う。逆に言えば、そうした環境を整えるために、魅力ある企業に市内へ立地してもらうこと、あるいは地場産業を育て、そのレベルを高めていくことが必要である。さらに、地域そのものに魅力を感じてもらうこと、そして若者が「ここで働きたい」と思えるような企業があることも欠かせない。こうした条件が揃っていないと、やはり子ども達は市外へ出てしまうのだと思う。

過疎が進む地域ほど、若い世代に残ってもらうことは難しくなる。薩摩川内市も人口が減少し、以前より活気が薄れてきている中で、若者が都会的な場所に憧れるのは当然のことかもしれない。

- ◇ 私は、子どもが地元を離れること自体は良いことだと考えている。地元で育ち、地元しか知らない環境から一度外に出ることで、世界が広がり、さまざまな経験ができるからである。そういった思いを子ども達には小さいころから伝えてきた。外に出れば、新しいコミュニティができ、友達もできる。良い社会との出会いもあれば、新たな場所での学びが広がることもある。今まさに、そのような経験を積んでいるのだと思っている。

将来、子どもたちが地元に戻ってくるかどうかは、それぞれがどのような人生設計をするかによるし、本人が決めれば良いことだと考えている。ただ、「何かあったらいつでも戻っておいで」とは伝えており、今は、外でしっかりと学び、成長する“勉強の期間”だと受け止めている。

- ◇ 私が大学を卒業したころは、就職先が少なく、やむを得ず地元に戻ってきたという経緯がある。私には、2人の子どもがいるが、2人とも福岡の大学へ進学した。私自身が福岡に出ていた経緯があったので、子どもたちにも「一度外の世界を見ることは良いことだ」と思い、背中を押した。帰って来てほしいという思いはあり、そう伝えてもきたが、今のところ2人とも戻ってきてはいない。しかし、福岡でそれぞれ頑張っているのであれば、それはそれで良いのではないかと感じている。若い人が、自分の進みたい道を選び、そこで力を発揮しているのであれば、応援したい気持ちである。

- ◇ 若い人が薩摩川内市に帰って来られるよう、市としてもさまざまな取組を進めている。これは、まさに皆さんの世代のお子さんやお孫さんにも関わる話だと思う。

今、全国的に奨学金の問題が深刻化している。昔の奨学金は、支給型で、公務員になれば返済が免除されるといった制度もあった。しかし現在の奨学金の多くは“ローン”のような形で、銀行から高額な借入れをして進学し、その返済に苦しむ若者が少なくないそうである。そうした中で、本市では若者のUターンを後押しするため、今年から

新しい制度を始めた。市外の大学へ進学した若者が、卒業後に薩摩川内市に戻り、市内で就職した場合、奨学金返済額の3分の2(上限30万円/年)を最長10年間補助する制度である。合計すると1人最大300万円を支援する仕組みになる。

若い人が都会へ出る一番の理由は、やはり“賃金格差”だと思う。昔は、「都会へ出て一旗揚げ、地元へ戻る」という話も多くあった。しかし、今は、帰ってくると都市部との賃金差が大きく、生活面で不安を感じる若者が増えている。そうした課題に対して、この300万円の支援は、地元へ戻る決断の一助になるのではないかと考えている。ぜひ、皆さんのお子さんやお孫さんにも、こうした制度があることを伝えていただければと思う。

また、私自身も子どもたちから「川内は遊ぶところがない」と言われた経験がある。市に対して娯楽施設の充実について提案は続けるが、現時点ではラウンドワンのような大規模施設の誘致には至っていない。

- ◇ 私も東京に住んでいたことがあるが、やはり都会には都会の良さがある。賃金水準も違うし、お店の種類も豊富で、遊ぶ場所もたくさんある。そうした魅力は確かに感じた。一方で、地元に戻って来て改めて思うのは、地域の人たちの温かさである。これは、都会ではなかなか得られない魅力だと感じている。しかし、薩摩川内市も人口減少が進み、若者が外に出ていくという大きな課題を抱えている。やはり若者に「ここに残りたい」と思ってもらえるような環境づくりは、まだまだ強化していく必要があると思う。例えば赤ちゃんを連れて気軽に利用できる施設や、暑い日や寒い日でも安心して遊べる屋内型の遊び場など。また、学力面においても、鹿児島県全体として課題があると言われていたため、教育の底上げも重要なテーマである。

こうした一つひとつの取組が積み重なることで、若者が「ここで暮らしたい」「将来は地元に戻りたい」と思えるまちづくりにつながるのではないかと考えている。

- ◇ 子どもの人生は、最終的には子ども自身が考え、選び取るものだと思っており、「地元に残りなさい」とか「外へ出たほうがいい」といったことを、こちらから言うことではないと思っている。

では、なぜ若い世代が薩摩川内市に残らないのかと考えたとき、やはり世代によって求めるものが違うのだらうと思う。